

# 巻 頭 言

## 惻 隠 の 情

仙台青葉学院短期大学学長  
藤 村 重 文

研究紀要「青葉」は巻を重ねるごとに読むのが楽しみになっている。

筆者も研究者のひとりとして、これまで医学に関する原著論文や症例報告、総説などの論文を書いてきたが、それらの書き方については恩師や先輩に教えられたことが大きく影響している。

2013年2月の本学ホームページ特別寄稿の拙文「回想—手術のこわい思いとうれしい思い—」の文章の最後に「呼吸器外科医を含む外科医として達した手術における心得は、ひとつに、術中この術者の一手が将来この患者にとって利益となるかどうかを常に考えながら手術を進めることが大切である」と記した。手術にはそれぞれの難易度に高低があり、個々の症例に対して術者の全知をささげる気力に加えて偶発症に対する一定の覚悟が必要である。全身麻酔下での手術では患者生命への危険性が増す。外科医にとっては術前からの患者との信頼関係は特に重要である。これは外科医に限ったことでなく、臨床医全体にとっても基本的なことであり、さらに敷衍すると、日常社会におけるコミュニケーションの大切さに到達する。話す相手に対する心配り、つまり医療側にとっては相手の気持を思い尊重するという忖度の習慣を備えていることが理想的である。さらにこのようなことは医療ばかりではなく、対人が必須な現代社会においては普遍的な条件である。

「惻隠の情」という言葉がある。惻隠の意味は大言海によると「傷ましく思うこと。あわれみ。」(孟子、公孫丑、上篇「惻隠の心、仁之端也」)である。この言葉は現代社会で死語となってしまった感があるが、中国の春秋戦国時代(BC770年—BC221年)の儒学孔孟思想として日本に伝わり、成長し濃縮された、「惻隠の情」は孔孟の仁、義、礼、智の四端(生まれながらに人に具わっている四つの性質)のひとつ「仁」につながる。孟子は同情や憐みの心がすべての徳目の出発点と考え、仁の根源が惻隠の情であるとしている。それは江戸時代の武士道精神のなかに強く根付いて現代に伝わった。日本の武士道は、新渡戸稲造によって英訳されて以来フランス語やドイツ語にも翻訳され、キリスト教圏の欧米においても知られるようになった。

武士道は戦うものの規律ともいべき日常生活での掟であるが、そのなかに今も生きているこの「惻隠の情(心)」は、その意味を考察すればするほど、より深い意味があることが理解でき、筆者が個人拘にも憧れる言葉のひとつとなっている。

学術論文でさえも、科学的な心に加え「惻隠の心」をもって書いた方が、より読者の心に残ると思うのである。